

浪華倉庫と帝人事件 (四)

廣岡 一男

(前号までのあらまし) 鈴木商店の破綻の結果、浪華倉庫の経営は台湾銀行の管理下に置かれることになったが、その後も依然全国有数の倉庫として毎期相当の業績を維持していた。ところが、台銀と浪華倉庫との間で極秘裡に話が進められ、遂に買収合併が成立した。帝人事件が勃発したのはその直後であった。若し事件の勃発が今少し早かったら、この合併談は中止されたに相違なく、従って浪華倉庫の運命は大きく変っていた筈である。

(七)

昭和八年の晩秋、浪華倉庫は台銀の手により、東京の浪華倉庫に売渡され、役職員(台銀から出向の役員及び経理部長を除き)全員引継がれることになった。私は、来たるべきものが遂に来たのだという諦めのような気持と共に、併合されて行く身の前途を想って暗然たる気分になるのを、どうすることも出来なかった。

例えば、浪華倉庫の門司支店長代理S君などは、私とは同年配であったが、合併後、若し彼等の下風に立たされるような事になったとしたら、私は、そんな屈辱にはとても耐えられないであろう。被合併会社の社員が出て行けがしの冷遇を受けるのは、世間によくある例である。そのような惨めな目にあい、不快な思いをしてからスゴスゴと去るよりも、寧ろ此際潔く退くに如かずと考えた私は、この事を日頃最も畏敬する島崎専務に申し出た。私の言葉を一通り

聞き終った島崎さんは

「君の気持はよく分かるが、しかし君の判断は間違っていると思う。第一、それでは余りに自分本位過ぎるではないか。」

「自分本位?」

「左様。苟くも君は支店長だ。その君が自分本位の狭い考えでやめたら、社員一般の士気にどんな影響を与えようと思えますか。君は寧ろ先頭に立って皆を引っ張って行くべき立場にあるのではあるまいか。自分自身の事よりも、先づ社員全般の事を考えるべき責任があると思う。」

「……………」

私には返すべき言葉もなかった。島崎さんは尚言葉を続け

「それに、浪華倉庫の明石さん(事実上の社長)は、絶対に差別待遇などしないと確言されている。それを信用しようではないか。そして、若しも口約に反して不公正な人事が行なわれるような場合には、その時こそ私も一緒に進退を決しよう。だから此際は私と一緒に堂々と行こうではないか。そして向うの連中に負けないよう頑張ってくれ給え。」

恩義ある島崎さんから諄々と説かれて私の心はきまった。

「よく分かりました。もう彼れは取越苦労などは致しません。」

そして御期待に添うよう一生懸命に頑張ります。」

よき上司に恵まれたことを有りがたいと思い、その知遇に応えねばならぬと、私は心に誓った。

(八)

当時、我国の倉庫業界は、三井・三菱・住友の三大倉庫が抜群の存在であって、わが浪華倉庫は残念ながら二流の域を出なかった。浪華倉庫は、歴史も古く、業界の名門であったが、倉庫の所在地は東京・小樽・門司だけであって、実勢力では矢張り二流倉庫であった。従って、同社年来の宿望は、倉庫地帯として最も重要な大阪・神戸及び横浜への進出であった。しかし営業倉庫としては海陸連絡に至便な立地条件が最も大切であり、新たに適当な土地を手に入

入れることは極めて困難であった。

ところが浪華倉庫の所在地は大阪・神戸・関門及び横浜であって、浪華倉庫のそれとは正に有無相補なう関係にあった。従って浪華倉庫としては、浪華倉庫は実に絶妙な買物であった。それに取締役会長明石照男と台銀理事高木復亨とは昵懇の間柄であったので、両者間の話合は極めて円滑に進み、昭和八年十月末この売買契約は成立を見たのである。売買価額は、営業権五〇万円を含め二六五万円であった。

浪華倉庫は、この吸収合併によって、経営規模は一挙に倍化し、三井・三菱・住友に伍して四大倉庫と称せられるようになった。

荷主(寄託者)との関係も円滑に引継がれたので、保管貨物もまた倍増し、貨物の種類に於ても大阪の繊維製品・鉄材・神戸の葉たばこ、横浜の鮭鱒缶詰、関門のプルプ・智利硝石等の増加によりバライティーに富む貨物構成となった。従って業績も好転し、利益金も倍増するに至った。

合併は十二月一日をもって行なわれた。この日、浪華倉庫の本店には「浪華倉庫大阪支店」の新看板が掲げられ、横浜支店は「浪華倉庫横浜支店」と改められた。下関支店だけは、対岸の浪華倉庫門司支店の所管に入れられることになった。

大阪支店長には島崎直幹が任じられ(後、常務取締役役に選任される)。横浜支店長には浪華倉庫の支店長だった毛受寛一が其儘任じられた。これらの人事は、引継ぎ社員に安心感を与えるための配慮によるものと思われた。

社員は同日附新規採用の形で引継がれ、全員それぞれ従前の勤務地に勤務のこととなった。これも人心動揺を顧慮しての措置であった。唯一人私だけは、本店営業部長代理に任じられて東京勤務となった。

私は、単身敵地に乗り込むような悲壮な思いで上京した。そして臍下丹田に力をこめ、胸を張って、日本橋区茅場町の浪華倉庫本店に赴いた。一斉に大勢の視線を集注されるのが感じられた。「俺は

浪華倉庫の代表のようなものだ。確っかりしなければならぬ。堂々と行動しなければならぬ。苟も卑屈な態度をとってはならない」と心の中で繰り返した。

浪華倉庫は渡辺雄馬という学校(小樽高商)の先輩が居ることは予め分っていたが、私のポストはその先輩の後任であった。だから私に対する処遇としては、先づ相当なものであったと云うべきであろう。渡辺さんは事務引継その他なにかと親切に教えて下さった。社風や慣例で吃驚するような事もあったが、ここでは省略する。

時の営業部長は、同社最大の實力者たる常務取締役林弥一郎氏であった。

(九)

その後、順次人事交流が行なわれたが、明石会長の「和ヲ以テ萬事ノ本トナス」との指導精神が次第に社内に浸透し、年を逐うて新旧社員の間は融和していった。

浪華倉庫出身の社員諸君は皆プライドと自信をもって、また若干の対抗意識をもって、実によく健闘した。

人事は概ね公平に行なわれ、役員に選任された者も左記七名に及んだが、これも社員全員の撓ゆまぬ努力奮闘に負うところ大であったと云うべきであろう。

常務取締役 島崎 直幹・広岡 一男

取締役 杉村馬太郎・畑 薫・山本真次郎・青木正倫

監査役 毛受 寛一

社風や伝統の異なる会社の合併には、人事が最も大事である。この場合、浪華倉庫側の受入れ方もよかったが、私達全員も、常に小にしては浪華倉庫、大にしては鈴木商店出身たる誇りと心意気をもって頑張り、些かながら成果をおさめ得た事を、自信をもって特筆しておきたい。

爾来春風秋雨、年を経ること約四十年、島崎直幹・杉村馬太郎・山下伴四郎等の諸先輩は既に他界し、当時最年少だった諸君も既に

停年を過ぎた。私も、図らずも人生の大半を東京で過ごし、齢既に古稀を越えたが、今でも折にふれて思うのは、若し帝人事件が今少し早く起っていたとしたら……という事である。

(あとがき)

読み返してみると、文中私事にわたる部分が少なく、聊か面映ゆい気もするが、それは余り堅苦しい文面になってはとの配慮からである。ご寛容を乞う。

なお斎藤席吉氏から態々河合良成著「帝人心鏡録」、今村弁護士「帝人事件弁論」というご蔵書を貸して下さい。ここに誌上を借りて厚くお礼を申し上げる次第である。

金子直吉翁歌碑 (伊豆下田唐人お吉の墓所)

お吉を弔

片水

神様が物言ふ時に成ぬれば

勲一等は君に授かる



金子直吉翁遺芳集出版奉告祭の 斎主を奉仕しての所感

生田神社権宮司 福田 義文

「人情紙よりも薄し」と云う言葉は、特に敗戦後の巷で聞くことが多く、平家物語の書き出しではないが「諸行無常の響あり」など思う昨今である。

しかしながら、いくつかの例外はあった。かつて私は明治天皇の御歌の御指南役であった高崎正風翁の伝記の編集と刊行を手伝ったことがある。この伝記は、言語学者であり、独逸語の阪大の教師であった北里蘭先生が、歌道の恩師である高崎先生の伝記を書かれたものの、大東亜戦争が次第に烈しくなって印刷が出来なくなかった。戦後北里先生のせつない念願を知った教え子の一人、阪大の某教授が退職金を出資して刊行の運びとなった。立派に出来上がった部厚い「高崎正風先生伝記」を手にせられた九十一才の北里先生の満足そうなお顔は、今も忘れることはない。

この心温まる師弟の関係と同じように、鈴木商店の大番頭金子直吉翁と柳田富士松翁に対する関係の社員の敬慕の念も、人目には異状にさえ思われる程の重厚さがある。私は昭和八年から商都大阪で、昭和十三年から神戸に転動したが、長い歳月鈴木商店の華やかだった繁栄と、その隆昌を築き上げた金子、柳田両翁の逸話もしばしば聞かされた。しかし、それは現実的な響はなく、あくまでも第一次世界大戦の中の金融恐慌や米騒動などの経済史話としての聞き流していた。

しかる処、兼ねてより親交のあった神戸史談会会員の柳田義一氏から、昭和三十九年の正月ある日、辰巳会主催による「金子直吉大人命二十年祭」の年祭を依頼された。私は祝詞作製のため約一ヶ月間、鈴木商店の社司や、金子、柳田両翁の伝記類を読んだり、関係者から色々とお

御会食・御宴会

ビフテキとすき焼

和室宴会 300名様迄
洋式宴会 500名様迄

スエヒロ

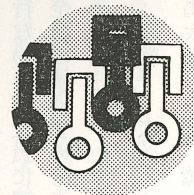
銀座店

銀座6丁目松坂屋裏
TEL (571) 9271-5

築地店

築地4丁目銀座東急ホテル向側
TEL (542) 3951-5

シンコーディーゼル



- 高速ディーゼル機関
(車両用・発電用・建設機械用
一般産業用・船用)
- トルクコンバータ
(TC型・DS型・SC型)
- 各種試験機
- 船用逆転減速機
- 流体継手
- バリビッチシート
- 電気ホイス
- 航空機用機器

神鋼造機

取締役社長 杉田 定雄

本社/〒503 大垣市本町1682/2 TEL (0584) 81-3121
東京・名古屋・大阪・神戸・九州

話を聞いた。更には、その足跡を訪れるなどして、ようやく祝詞作文を終り、二月二十七日オリエンタルホテル(旧館)に於て金子直吉大人命二十年祭の斎主を奉仕した。神主の務は、崇敬者と神とを結び、中執り持ちの役とされているが、その日金子直吉大人命の霊を招き、神離に向っていると、後方に参列の辰巳会の方々の激しい謝恩の熱意が、私の体にひしひしと押し寄せまわって来た。まことに体のひきしまる感動の日であった。その日以来、縁あって二、三回辰巳会の会合にお招きを受けた。回を重ねる度に、金子直吉翁に対する高畑誠一会長以下全会員のまことに旺盛な師慕の情に感銘した。

前述したように、金子、柳田両翁の伝記は既に立派なものであるが、辰巳会の人々にとっては、まだまだ物足りないものがあるらしく、金子翁に親の如く恩愛を受けたと云う橋本隆正氏が、金子直吉翁の遺墨類を蒐集し、之を刊行しようと努力された。しかし、その上梓を見ない中に他界された。その志を継いで辰巳会の手で、昭和四十七年一月一日遂に「金子直吉遺芳集」が刊行された。

まことに申し訳ないが私は、祝詞作製上その遺芳集を金子翁より先に、翁

の筆跡類を拝見させて頂いた。私は趣味と云うより青年時代から、心のより処としてささやかながら古今の書簡類を収集していた。その人の書かれたものに接すると、その人に会っているような親近感があった。この遺芳集の中で、先づ心をうたれたのは金子翁が大正六年十一月一日付のロンドン支店長高畑誠一氏に宛てた手紙であった。世界の戦乱の変遷に対し、順々と話しかけるように説く上司と部下の心のきずな。辰巳会の人々が引込まれたように、私もいつのまにか金子さんのエレキのような魅力にすいこまれた。その外、集録された俳句や随筆紀行の全てに、金子さんの芬々たる淡雅と啖呵。それは、今も逞しい生命力にみちぎったものが感じられる。

同年同月二十一日、金子直吉遺芳集出版奉告祭も無事奉仕することが出来た。これも、祝詞を奏上している後方の辰巳会の誠心にささえられたもので、私は久し振りで心足った一日であった。

註 私祭典終了後、直会席で高畑さんに「あの天下三分の計」の書翰を写真版にして商道の心意気にしてほしいと頼んだ。高畑さんは「是非共希望にそいたい」と語